

'86愛のサン・ジョルディキャンペーン

'86愛のサン・ジョルディキャンペーン

サン・ジョルディはスペイン・カタルニャ地方の守護神、中世から厚く尊敬されています。この聖人を讃え、4月23日、女性は男性に「本」を、男性は女性に花を贈ります。このサン・ジョルディの日を、世界に広がる人間共感の場として日本文化輸入し、国際化時代にふさわしい「愛の習慣」として築き、「新しい愛と知性のしきたり」として普及させるため、書店を核として全国的にキャンペーンが展開されます。

▶本誌占いコーナー「今日のあなた」でおなじみの竹村亞希子先生に、そのお話を伺ってみました。まず、このキャンペーンを行うことになったいきつから

竹村 おとしいき年末くらいに、たまたま私の会社に入りました。いきなりという感じがあったんですけど、一年に一回、女性は女性にバラの花を女性は男性に本を贈る習慣があるというだけだ、それ以上のことはいくらも知らないというんです。それを聞いた瞬間、正直って私は、とにかくキレイだ、面白いと思います。厘細も何も抜きで、これは日本にもってきたい、と(笑)

▶それだけカタルニャ友好親善協会まで作ってしまわれた竹村さん ええ、そのあと詳しく聞こうとも、それ以上は私も知らなうとも言われまして、私も必死に百科事典などで勉強したんですが、ほとんど出てません。でもカタルニャ地方やスペインの歴史をいろいろ勉強していたうちに、これが本当に日本にもってこられるとしたらどうなるか。本や花を贈る習慣が定着している日本では、むしろこれからの21世紀に定着するんじゃないかと思い、そのための方法をあれこれ、数人の仲間たちとあれも会議を開いて考えました。

とりあえずカタルニャと交流をしないきゃいけない、という単なるイベントとして取り入れる

だけではなく、これをきっかけにして多くのものを日本人が吸収するためには、まず「日本カタルニャ友好親善協会」を作ろうと皆で決めました。

▶すごく国際的なんですけど、そういう団体なんかは簡単にできるものですか？

竹村 その時のメンバーで、いま本格的な協会になっただけ残っているのは私と、筑波大学教授の野村山真樹先生です。野村山先生はスペインの権威者です。たまたまよく知りまして、教えていただくか直接お話を教える日々にしてはく「本と花の日」についてはよく存知なので、それはすばらしい、自分もぜひ会議に出席し、日本とスペインの虹のかけ橋を実現させていってと言っていました。でも正式な協会では片方の国勝手に作ってもいけないし、一度スペインのカタルニャに行き、実際に政府と交渉してやることになりました。とりあえず私が、日本カタルニャ友好親善協会準備委員会として乗り込んでいきます。

▶サン・ジョルディの日とは？

竹村 いろんな説がありますが、スペインのモンプランという村では、恐ろしい呪いのけにえとして差し出されることになった王家の美しい姫を救うために「サン・ジョルディ」という名の騎士が現れ、黄金に輝く剣の光と突如で獣を退治したといわれています。この伝説から転じて恋人たちの守護神サン・ジョルディの色となり、赤いバラが「愛と勇気」のシンボル



になったということですが。また「ドーン・キホーテ」で有名なスペインの作家セバステアンの死を悼み、毎年4月23日で開催されている本の市が一掃になって、愛のシンボル「花」と同性のシンボル「本」の市が行われるようになり、「サン・ジョルディの日」として今日に至っているということですが。

▶スペインのご様子とは？

竹村 仏、スペイン語がしゃべれませんでしたから、むこうに住んでいて、たまたま日本に帰ってきた人を紹介して、その人を頼って行ったんです。でも全然本気にならなかったらしくて、こちらは今全く遊びじゃない。シブナな気持ちでしたけど、結局、観光局、商業局、伝統文化局全部を回って「ぜいっ喧張ってほしい」と言われたの、このじゃあ意味がない。でも最後に広報課に言ったところ、その人がすごく喜んでくれて、これは本気なのか、もし正式な協会としてサン・ジョルディに来年だったらジョルジ・ブレイと意見できるうちに、約束はできなくちゃどうしようというって下さいました。

▶一国のことで、なんですごくいことです。

竹村 ついにジョルジ首相に協会の常任会長になってくれ、これだけのいい話だからいいじゃないかと言ったら、それはちょっとおもしろくない、私は女性イメージでいいんじゃないかな。ジョルジ首相の奥さんのマルタ夫人に頼んでおようという話です。

▶実際の「サン・ジョルディの日」はいかがでしたか？

竹村 去年の4月に改めて見たんですがさすがすごくキレイなお祭りなんです。イベントで、人工的に仕掛けたものも日本に



竹村亞希子先生

占いの玉手箱主宰
日本カタルニャ友好親善協会推進

いくらでもあるけれど、向こうは素朴なもの、本当に花と本が置いてあるだけなのに、そういう屋台あがゆる所や軒を並べている人が、それがもう何年かお年寄りまで、それぞれ思い出を持ってプレゼントを買っていく。そしてそれが自然に溢れて、ひとつの叙情詩のようにして町全体に広がってゆく……。

▶ロマンチックでね……

竹村 ロマンチックに仕掛けたイベントじゃない、歴史的に定着しちゃっての習慣、もう一つ一種の愛情表現ですよね。乙女心をときめかせて本を贈るところ(笑) その本もた贈ればいいというのじゃない、相手をはよとよく知って、この人は何を読みたいか、しっかりわかってないじゃない。日本のは発想ってって、私はこの本が好きだ、私のこの考え方はこうで、人生観はこうなんだ、これを相手に受けたい、という相手を探す場合が多いですよ。ところが向こうで一番大きな新聞紙パンガディアの女性記者が語っていた時に、とんでもないと言われたんです。冗談じゃない、それは考え方が間違っている。改めて下さい。本を

贈るということは相手をおなかがどれどれ理解できているかということ、これは إنجلتراテストなんです。男性の側からみたら、この女性は自分をこれだけ理解してくれたのかという愛情の表現であり、広い意味での愛情のあかしになるんです。と。

▶贈り物をする時は気をつけたいですか(笑)？ さて、今後の展開方法などは？

竹村 全国の書店、花屋さんに呼びかけてキャンペーンを行います。7大都市でのイベントのほか、サン・ジョルディの読書くじの特賞では、150名をスペイン・カタロニアの旅へご招待。また、4月16日に行われる夜のヒッツスタジオでは、イメージソングを歌っているチュロップの皆さんを、バルセロナから宇宙へ招待します。

▶久々の全国的キャンペーンが盛り上がるようです。女性の皆さん、今からしっかり本の選択しておきましょう！

竹村 確かに彩がフットでなし、本というモノを贈るんですけど決してモノじゃありません。その中に秘められた非常にソフトなもの、「読む」楽しさ。この本やバラに相手に対する思いやり、本がに相手の心とを考えると、そんなふうにとらえてゆけば、単なる行事だけでなく、新しい価値観、ひいては文化の創造に発展していき、大げさな言い方をすれば歴史の中の流れのひとつとなすも可能だと思います。本とバラの日、4月23日の「サン・ジョルディの日」を、美しく、人の心に残したいと願っています。

▶本日はありがとうございました。

